

イケニ族の戦う女王ブーディカ

紀元43年、第四代皇帝クラウディウスの時代、ブリテン島に侵入した古代ローマの遠征軍は、圧倒的な兵力で在地の諸部族を制圧し、属州ブリタンニアを設置した。在地のブリトン人社会は、総司令官のクラウディウスによって、ローマ式の地方行政区＝キピタス（ラテン語で壁の中に大勢の人が集まるという意味）に再編されたが、従順な部族は同盟関係により、王統の存続や権利が許された。しかし、いったん王統が途絶えると容赦なく属州に組み込まれた。

古代ローマの歴史家タキトゥスは、イケニ族の王プラスタグスの死に乗じて、ローマ軍が蛮行を働き、住民に圧政を加えたことを記している。これに対して、紀元60年頃、王妃ブーディカは、諸部族を率いて大規模な反乱を起こし、ロンドンウムを破壊するなど、一時はローマ軍を脅かしたものの、最後には、ローマの名将スエトニウスの戦略によってあえなく鎮圧されてしまう。

ブーディカの伝記は、長く忘れられていたのが、ルネッサンスの時代に発見され、19世紀、ビクトリア女王と同じく勝利の名をもつ伝説の女王として人気が高まる。ロンドンの中心、ウェストミンスター橋のたもと、ビッグベンの道を挟んだ街頭には、彫刻家トーマス・ソーニクロフトによる銅像「ブーディカと娘たち」（1905年）があり、二人の娘を従え、腕を前に突き出し、馬車で進む女王の勇壮な姿が表現されている。

ベンタ・イケノラムとケスター遺跡

イケニ族とは、現在のノーフォークの一角を拠点にしていた部族で、プトレマイオスの『地理学』（2世紀）や『アントニヌス旅程表』（3世紀）には「ベンタ・イケノラム（イケニ族の町）」の地名が見える。ノリッチの町の南郊、ケスター・セント・エドモンド村が、このベンタ・イケノラムだと認定したのは、16世紀の古代学者ウィリアム・カムデンだった。ケスター村の広大な遺跡は、407年、ローマ軍がブリテン島から撤退した後、廃墟化した町が土中で良好に保存されてきたものだ。1928年に撮影された航空写真では、街路のプランや多様な建築物の存在が明らかになり、ケスターに対する近代的な調査の幕開けとなった。タイムズ紙に掲載された写真を見た考古学者のモーティマー・ウィラーは、遺跡の重要性に気づき、明確な目的を持たない発掘調査は避けるべきだと論じたが、ノーフォーク・ノリッチ考古学協会による調査委員会が組織され、1929～1935年、マンチェスター大のドナルド・アトキンソンが、フォーラムやバシリカ、南側の門などの場所を発掘した。

遺跡に対するアトキンソンの解釈は、町が設立されたのは、ブーディカの反乱の余波が収まり、イケニ族に平和が訪れた直後のベスパニアン帝の時代（紀元69～79年）だというものだ。しかし、ノッティンガム大のウィリアム・ボーデン博士は、この解釈は、在地のブリトン人が文明のローマ人より劣るという大英帝国時代の色眼鏡がかかり、また、ブーディカの反乱後の後始末で町が設立されたことを当然視するなど、問題があると指摘する。ボーデン博士によれば、イケネの町という名前が表すように、在地の人々が、どのように、ローマと交流しながら、

ローマの都市の考えを採用したかを考えるべきなのだ。

ボーデン博士は、このような問題意識から、2005年、遺跡を所有管理するノーフォーク考古学トラストに働きかけ、長期的な発掘調査プロジェクトを開始することにした。新しく始まった調査プロジェクトでは、まず、遺跡全体の物理的な探査が行われ、それまで知られていなかった円形遺構の存在がわかり、ローマ期以前の鉄器時代のものかとも思われた。しかし、発掘調査では、それは単なる自然による堆積の結果だと確認された。さらに調査が進むにつれ、鉄器時代以前の居住の証拠が見られないことや、アトキンソンの想定とは異なる町の歴史もわかってきた。町の街路が整備されたのは、紀元100～120年を遡ることはなく、ブーディカの反乱が終わった70年代ではありえない。また、ローマ期の他遺跡の多くとは異なって、3世紀の後半に強固な城壁や新しいフォーラムが建築され、町が最盛期を迎えるのが紀元4世紀だということも明らかになった。この時期、イケネの都市が政治的拠点として発達するのは、4世紀初頭にブリタンニアが4つの州に分割されたこと、北方からの異民族の侵入に備えてノーフォークの軍事的重要性が高まったことと関連する可能性がある。しかし、ローマの撤退以降、町が棄却されてしまう理由はやはり定かではない。

コミュニティ考古学と遺跡の現在

ボーデン博士のケスター・プロジェクトで印象的なのは、立ち上げ当初から、地域の人々との共同作業をめざしていたことだ。発掘調査には、多くの市民がボランティアとして主体的に参加し、また、意欲のある市民が独自にグループを組織して、専門家のサポートを受けながら、地域の関心をもつ人々に考古学的技術のトレーニングを行ったり、小さな調査などは、自分たちだけで行ったりと、発掘調査そのものが市民参加、オープンになっている。近年、イギリスでは、そうしたコミュニティ考古学が非常に盛んで、各地で実践がなされている。野球やサッカーなどと同じように、考古学の世界でも、専門的かつ高度なプレイをするプロがいて、それと同時に、アマチュアの人たちも趣味として、もちろん無報酬で自らプレイを楽しんでいるという感じだろうか。

ノリッチの郊外の田園地帯にたたくケスターの遺跡は、なお多くの謎を秘め、ノーフォーク考古学トラストが、管理、保存・修復、市民への公開に責任をもち、過剰な復原



写真 ノリッチ郊外のケスター遺跡

は行わず、代わりに、拡張現実（AR）の技術を採用したアプリを作成するなどの取り組みを進めている。そのアプリは秀逸で、現地でスマホやタブレットを遺跡にかざすと、ディスプレイに当時の町並みが浮かび上がってくる。